

建築家中原暢子の設計した小間に関する考察

—建築家中原暢子の研究 第7報—

深石 圭子

建築家中原暢子が林・山田・中原設計同人で取り組んだ作品は、個人住宅の他にそれに付随する茶室が14件存在する。小間の設計においては、本歌を写して制作することもあった。中原は、江戸千家一円庵を評価する一方で、自身の設計は正客からは亭主の点前が見えない風炉先床の設計が多い。このことより、中原が点前よりも、床の間の設えを表現することに重点を置いていたことが分かる。また、下地窓や連子窓の開口部についても、床の間を照らすような配置で計画されている。

キーワード：中原暢子 小間 三畳台目 風炉先床 一円庵

1. はじめに

中原暢子（以下、「中原」という）（1929-2008）は、近代建築全盛期に林雅子（1928-2001）、山田初江（1930-）とともに林・山田・中原設計同人（以下、「ハヤナ設計同人」という）を設立し、住宅設計を中心に活躍した女性建築家の一人である。

1-1 研究の背景

中原は茶人建築家ともいわれ、設計活動を通じ、次第に茶室設計に精通し、茶道の道を極めるようになる。晩年、中原自身が設計した自邸には3室の茶室を実現している。ハヤナ設計同人時代には、14件の茶室設計に携わっている。

1-2 研究の目的・方法

ハヤナ設計同人の元所員によると、Ono 邸茶室は、不審庵の写しとされている。中原の設計した小間を分析することで中原の茶室、特に小間に対する考え方を明らかにすることを目的とする。

研究の方法としては、中原と茶道のつながりを明らかにするとともに、生前設計した茶室の小間を対象として分析するために、北尾春道著『茶室

の展開図』を参考として小間の比較を行い、中原の設計した各小間についての中原の言説、設計担当者及び建築主からの聞き取り調査によって考察を深める。

本稿に記したものの他にも写しと推測されるものもあり、ここでは根拠をあげ写しとして判断しているものもあるが、それは表千家に正式に問い合わせたものではないことを了承願いたい。

2. 中原と茶道のつながり

中原は、趣味としても茶道をたしなみ、表千家堀内家の千葉宗立（1949?-）に師事し、中原自身も師範（茶名：宗暢）として多くの弟子を育てた。

2-1 学生時代

中原は1945年に東京家政専門学校（現：東京家政学院大学）に入学し、茶事に関する基本的な知識を、専門学校時代に授業を通して学んだと思われる。『東京家政学院五十年史』によると、1936年頃の記録として、授業課目名に学科担当講師として「茶道」の担当として大日本茶道学会第三代会長の田中仙樵（1930-1960）の名前を見ることができる。同氏は、大江スミが編纂する「礼

儀作法全集の第5巻～7巻」の執筆も担当している。また、大江スミにより執筆された『応用家事精義』や『礼儀作法全集 第1巻:作法基礎・住居と書道篇』には、茶室にも通ずる「床(とこ)の種類」等の記載がある。中原が在学時代は校舎が移転していたこともあり、直接田中仙樵から講義や実習を受けたかどうか不明である。

2-2 池辺陽と茶室設計

中原は、立体最小限住居「No.3」(設計:池辺陽(1920-1979)に憧れ、機能主義の先端であった東京大学生産技術研究所の池辺陽(1920-1979)研究室へ入所する。ここで初めに設計担当するのが、施主の父親が茶人であった「住宅No.10」(1953)であった。中原は教鞭をとった東京家政学院大学家政学部住居学科での最終講義(1999.1)で、その時のことを次のように振り返っている。

「…私ね、運命的なものじゃないかと思うんだけど、池辺研にいた(頃)、六家のお茶の先生の家なの。息子さんは作曲家なの。その息子さんが池辺さんと同級生。だけどお金はそのお父さんが出すわけよ。で、茶室なんて全然知らないの、私は。池辺さんはとってもよく知っていらして、つべこべ言うんだけど。よく分からないから、せつせと作って、(見せたら)そのお茶の先生にもものすごく怒られ、本当にものすごく怒られちゃったの、そしたら2件目がまた茶室だったの…。もう、泣きたくなるようだったの。…」と述べている。

また、中原は、茶道における池辺陽の影響として、

「池辺さんは、茶室もつくられています。私はそのころからお茶の先生の家縁があって、よく担当させられたのですが、池辺さんは、その茶室の壁をコンクリートブロックで設計しました。和風の砂壁や聚楽はどうもお嫌いでした。そういうところも、たいへん勉強になったと思っています。」とも述べている。

2-3 茶道の教授

1960年代後半、中原が40歳を過ぎた頃、茶室設計の依頼が多いことから、池袋の教室に通い、基礎から茶道を習い始める。しかし、茶道の所作

についての教養は得られるものの、茶室自体の知識を得ることが出来ず、京都茶道の家元に指導を受けるようになる。

2-4 茶室の写し

1980年代前半、中原は、茶室の写しの設計を始めるようになる。写しとは、本歌(茶室の原形)を写したもののことを言う。伝統を尊重し茶の湯の創始者たちの作ったもの、すなわち好みのものを崇拜し、または別な立場で保存するためにそのまま写す場合が多い。家元の写しについては、厳しい掟があることが多く、その流派の相伝を得たものしか許されない。

2-5 大病をきっかけとした自邸の設計

精力的に茶室設計に取り組む中、1981年頃クモ膜下出血に倒れ、半年間仕事のできない状態が続いた。

1984年には、「茶室と水屋」と題し、中原の設計であるK邸(Sai邸)を紹介している。1986年には同作が雑誌で紹介される。この住宅の施主は、女性であり、はじめは茶会を通して中原と知り合ったという。また、実施には至らなかったが1994年改築の企画設計を行ったYam2邸の施主は、中原の茶道の弟子である。このように中原は茶道を学ぶなかで茶室設計の注文を受けていた。

その一方で中原は、病後これからの設計活動に不安を感じ、1985年、自邸「茶室のある家」を設計する。当初はお茶の稽古場として場所貸しを、また、懐石料理の先生を呼んで、懐石料理の作り方や作法の教室を開くつもりで設計したという。

3. 自邸「茶室のある家」

この自邸は、中原が老後の終の棲家として設計したもので、所員は一切図面書きを行わず、中原が一人で手掛けた作品である。自邸に設けた小間に「暢庵」と命名する。自宅では、これにちなんで暢庵研究会と称し、茶会や懐石料理教室を開いていた。元所員の白井克典(1957-)によると「中原先生はそんなにフォーマルではないので、結構好きな人を(茶会に)呼ぶっていうこともあってね。全然心得のない人だって平気で呼んでいまし

たからね。職人さん呼んでみたり、いろいろ。皆さん、集まってワイワイするのが好きだったから。お一人だから、特に。好きだったから、そうやってされたように思います。」ととても気さくであったことがうかがえる。

自邸は1階が茶室（広間2室、小間1室）とこれに関連する水屋が2室と応接室、懐石料理のためのスペース（台所）があり、2階には、プライベート空間である個室、洗面脱衣室、浴室が配されている。1階小間は、表千家堀内家の家元堀内宗完長生庵（当時）から写しの許可を得て設計したものである。畳には床暖房が入っており、冬場の茶事も快適に行えるよう、中原の気遣いがみとれる。

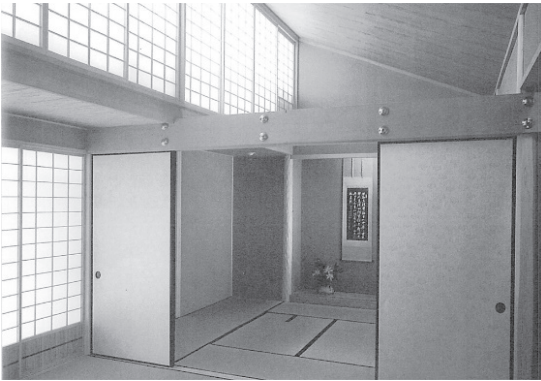


Photo1 中原自邸広間「東匠軒」内観

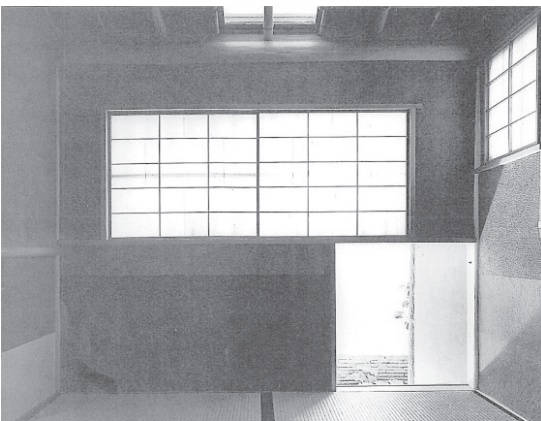


Photo2 中原自邸小間「暢庵」内観

なお、自邸掲載誌は、中原暢子：「女性建築家だから建てられた住みやすい家」、『Sophia』、第

3巻、第6号、p.201、講談社、1986.6と、中原暢子：「茶室のある家」、『新建築（住宅特集）』、pp.40-47、新建築社、1986.10。また退職記念として出版した中原暢子：『中原暢子の木造住宅設計図集』、1997に実施図面の掲載がある。掲載誌によると「中原は「茶室」と「近代建築」の接点を求めている」との記載がある。

ハヤナ設計同人は3者の建築家共同主宰として運営していたが、営業的なパイプは個人で持っているという感じであったという。

その後、1992年にはUIFA JAPON 日本支部が設立され、中原はその初代会長となり、1998年に第12回大会を日本で開催する。テーマは「環境共生時代の人・建築・都市」。中原や副会長であった小川信子（1929-）の呼び掛けもあり、PODOKOのメンバーが多く参加する。この時、中原は清澄庭園（東京都江東区）の茶会で亭主を務める。



Photo3 清澄庭園での茶会（中央：亭主の中原）

3-1 中原の茶室設計と和金物等の材料について

中原は、San邸の設計がきっかけとなり、東京・赤坂の建築金物屋「清水商店」（1919-2008）に通い、襖の引手や襖紙、和釘等を仕入れ、そこで茶室に関する建築材料について覚えた。後に京都の唐紙製作工房「唐紙屋長右衛門」（1624-）の十一代当主千田堅吉（1942-）・郁子（生年不明）夫妻と知り合い、唐長襖に使用する襖紙を直接仕入れるようになる。こうして茶室に関する材料のネットワークを確立させていく。

3-2 中原の茶道に関する考え方

中原は、亭主等の客を出迎える立場での設計に重きを置いていた。水屋で熱湯を流す際、流しの材料として銅板を用いると膨張音がすることも気にしていたようである。

中原は冬場の暖をとる手段として、畳表のすぐ下にヒーターを仕込み、冬場の快適性を得られるようにしている。これは、自邸の設計で初めて採用し、その後、Mor 邸の広間、Ono 邸の広間・小間で採用している。元所員の大島康治（1964）によると、中原は踏み心地に違和感がないかを気にしていたという。

以上のように、中原は茶道の裏方の使い方を熟知しており、意匠よりは使い手の立場に立った設計をしていることが分かる。

4. 中原好み 江戸千家一円庵

東京上野不忍池の畔に建つ一円庵は、江戸千家初代川上不自（1716-1809）が関宿藩主久世大和守の下屋敷（下神田）内に設計したものである。不自が18歳の時に表千家7代如心齋宗左（1705-1751）に学び、24歳で「宗雪」を称す。如心齋宗左の命を受け、39歳で江戸に出て茶道を教授し、江戸千家の基礎を築いた。1962年には玄関、寄付と共に都重宝（現：東京都指定有形文化財）の指定を受けた。

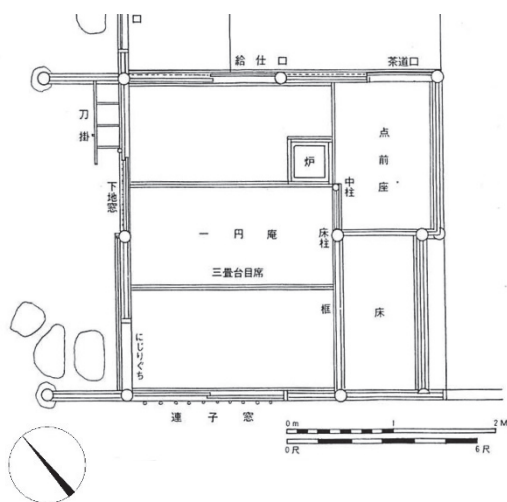


Fig.1 一円庵平面図

一円庵の特徴は、三畳台目の台目切の本勝手であり、点前座正面の中柱と床柱の間に位置する袖壁の下部に吹抜を設けており、正客の客座から床の間脇にある亭主点前の手元が見えるように計画されている。中原は、一円庵のことを「長生庵、待庵より広いということもあるが、ゆったりとした品のよい茶室である。」^{引用1)}と評している。

川上不自が記した「不自筆記」は、川上不自が師匠である如心齋宗左の茶説を見聞きしたことを書き留めた茶書であり、如心齋宗左と川上不自の間柄がわかる貴重な資料の一つでもある。原本の一つは、表千家堀内家に残されている。この書は、江戸千家茶の湯研究会が長生庵から借り受け1979年に活字として出版している。また、この一部は、堀内宗心（1919-2015）によって、『茶の湯の修練1七事式〔表千家〕花月』（2008.10 世界文化社）等に部分的に現代語訳がなされ解説が施されている。同書には、花月の式Q&Aの回答者として筆者の堀内宗心（1919-2015）（堀内長生庵前主）と中原の茶道の師千葉宗立（現堀内長生庵行分）の名前が記載されている。

中原の遺品に「不自筆記」の写しとみられる原稿が残されており、その表書きには「暢庵茶事教室『不自筆記』昭和63年3月」と書かれている。千葉宗立による講義や解説があったものと推察される。

このように表千家や堀内家と江戸千家とは関わりが深く、特に川上不自が設計したと伝えられる一円庵に中原が共感を覚えるのは自然なことと推察される。

5. 三畳台目の茶室

三畳台目は、千利休が大坂屋敷ではじめて使った形式といわれ、点前座に中柱を立て、袖壁をつけ、隅に釣棚をし、炉は台目切りにし、床は台目床としたものである。古くは袖壁は下までついていた。

5-1 「茶室の展開図」に見る三畳台目

北尾春道著の『茶室の展開図』（1979.8）は、全国に所在する（取り壊されたものも含む）茶室のうち、主に桃山時代から現代に至る約400年間に、

建てられた茶室百席をまとめたものであるが、これに掲載されている三畳台目の茶室は、計 20 件あり、そのうち点前座と床の間が並んで配される風炉先床は計 5 件に限られる (Table1)。

床の間と点前座を壁で区切るのか、開放するか又は一部を吹抜とするのかに分かれる。吹抜とするものは一円庵、清香軒があげられる。前者は床上、1尺7寸5分。後者の床柱は四方角竹で、板床の上、2尺9分である。一部を吹抜とするものは具体的には床窓を設けるもので、南禅寺金地院の小堀遠州好み「八窓の席」の床窓は床上3尺3寸の場所に1尺6寸×11尺8寸の大ききで確保している。豊秀舎の壺形吹抜は手元に作り採光を確保している。吹抜が全くないものは、護国寺の茶室化生庵のみである。このように三畳台目、風炉先床で吹抜がないものはしていない珍しい小間であるといえる。

14 件 (計 24 室) のうち三畳台目は、4 室あり、そのうち風炉先床は 3 室である (Table2)。更に点前座と床の間の間に吹抜を設けたものは皆無である。三畳台目風炉先床は、正客から亭主の点前が見難い欠点がある。しかし、中原の設計した三畳台目の小間はすべてが風炉先床である。

つまり点前を見やすいようにするには、一円庵の例があるように、床の間と点前座の間の壁を吹抜とすれば簡単に実現できる。しかしこれを採用していない。

3 室とも一円庵のように床の間と点前座の間の壁の下部を吹抜とはしていない。つまり吹抜を設けないことを肯定的に捉えていると考えられる。これは、亭主の点前よりも、客の床の間への視線を重要視した結果であると思われる。

6. 中原の小間設計に対する考え方

茶室研究の第 1 人者である中村昌生(1927-2018)は、『茶室の見方』(主婦の友社、1987)の中で、「亭主にとっては、-- (中略) -- 床飾りをし、点前座

5-2 中原の三畳台目

一方中原が、ハヤナ設計同人で設計した茶室計

Table1 三畳台目席と風炉先床

	茶席名	相伴席の有無	深三畳○ 平三畳●	中柱の有無	中柱の有無		床と吹抜		備考	
					中柱の材料	袖壁の吹抜高さ(尺)	床の形式	吹抜高さ(尺)	流派他	
茶室の展開図	一円庵	三畳台目席	×	○	○	赤松皮付丸太(曲柱)	2.2	風炉先床	1.75	江戸千家
	岩崎家の茶室	三畳台目席	○	○	○	赤松(曲柱)	2.2	下座床		
	燕庵	三畳台目席	○	○	○	赤松丸太(曲柱)	2.2	下座床		数内家
	錦華寮の茶室	三畳台目席	○	○	×	—	—	下座床		
	護国寺の茶室化生庵	三畳台目席	×	○	○	桜皮付丸太	2.1	風炉先床	吹抜無し	
	春草庵	三畳台目席	×	○	○	赤松丸太(曲柱)	2.2	上座床		
	松琴亭	三畳台目席	×	●	○	赤松丸太(曲柱)	2.2	下座床		
	清香軒	三畳台目席	×	○	×	—	—	風炉先床	板床	
	天祐庵	三畳台目席	×	●	○	赤松丸太(直柱)	2.18	上座床		不審庵写し(最古)
	南光	三畳台目席	×	○	○	赤松丸太(直柱)	2.2	下座床		
	又織	三畳台目席	×	○	○	赤松丸太(直柱)	2.2	下座床		
	八窓軒	三畳台目席	×	●	○	桜自然木(曲柱)	2.2	下座床		
	不審庵	三畳台目席	×	●	○	赤松皮付(直柱)	2.26	上座床		表千家
	豊秀舎	三畳台目席	○	○	○	杉小丸太(直柱)	2.15	風炉先床	壺形吹抜	
	八窓の席	三畳台目席	×	○	○	椿小丸太(曲柱)	2.2	上座床	3.3(床窓1.8×1.6)	
	夕顔亭	三畳台目席	○	○	○	赤松丸太(曲柱)	2.2	下座床		
	幽月庵	三畳台目席	○	○	×	—	—	下座床	2.1	
	又織	三畳台目席	×	○	○	赤松丸太(曲柱)	2	下座床		
	麟閣	三畳台目席	○	○	○	榎(クヌギ)(曲柱)	2.16	下座床		
	六窓庵	三畳台目席	×	○	○	香節(曲柱)	2.1	下座床		
露滴庵	三畳台目席	○	○	○	赤松丸太(曲柱)	2.2	下座床			
San邸	三畳台目席	×	○	○	香節(曲柱)	≒2.2	風炉先床	吹抜無し		
Sai邸	三畳台目席	×	○	○	赤松(曲柱)	≒2.2	風炉先床	吹抜無し		
Mor邸	三畳台目席	×	●	○	赤松皮付(直柱)	≒2.2	上座床	吹抜無し	表千家	
Ono邸	三畳台目席	×	○	○	赤松皮付(直柱)	2.19	風炉先床	吹抜無し	表千家	
中原自邸	二畳台目席	×	○	○	赤松皮付(曲柱)	2.1	下座床	2.1	表千家	
										長生庵の写し

Table2 中原の設計した三畳台目一覧

建築名称 (設計年・所在地)	San 邸新築 (1981・東京都)	Sai 邸新築 (1981・東京都)	Mor 邸新築 (1988・東京都)	Ono 邸 (1990・埼玉県)
流派	(記載なし)	(記載なし)	表千家	表千家
室名	茶室 2	茶室	茶室三畳台目 ※不審庵の写し	茶室小間
寸法体系(三畳台目)	平面:メートル・尺貫 断面:尺貫	平面:メートル 断面:メートル・尺貫	平面:メートル・尺貫 断面:尺貫	平面:尺貫 断面:尺貫
平面図				
【凡例】	<p>※正客からの床の間・点前への視線を示す。</p> <p>運子窓 ← 下地窓 ←</p> <p>※外部からの光の入る方向を示す。</p>			
丸畳の大きさ	910×1820 mm	(図面表記なし)	(図面表記なし)	315×315 尺:京間
床の間の仕上げ	薄緑床	豊床	豊床	豊床
床の切り方	台目切	台目切	台目切	台目切
勝手	本勝手	本勝手	本勝手	本勝手
床の種類	塗廻床	塗廻床	本床	本床
床の間と点前座の位置関係	風炉先床	風炉先床	上座床	風炉先床
茶室の広さと形	深三畳台目	深三畳台目	深三畳台目	深三畳台目
畳寄せの材料	(図面表記なし)	杉	(図面表記なし)	杉
暖ヒーター	無	無	無	4枚
炉壇	無	無	無	本炉壇土塗物(支給)
天井伏図				
天井仕上げ	床の間: 杉合板、かがみ板 床前: 蒲葦縁、釜釣かん 点前座: 板ノネ、中竹 その他: 野地板、竹	杉合板鏡板張り ガマ竹棹縁天井、廻り縁竹	杉鏡板(鏡)張り 蒲、竹葦	鏡天井 平天井、蒲つる止φ5寸(清水竹)約直径0.55尺2本先、リヤッコ、和釘押え、廻縁、番葦赤松杉角
突上窓	寸法(D×H): 450×300 mm 材料: スプレー、障子和紙貼	無	有 (図面表記なし)	1.6×2 尺 鏡戸(雨戸仕立)付、猿戸入替、障子:秋田杉、和紙貼
天井高	床前: 6.3 尺、廻り口側: 高 6.8 尺、低 5.6 尺	床前・客座: 6.2 尺	床前: 5.94、廻り口側: 高 6.66 尺、低 5.67 尺	床前: 5.94 尺、廻り口側: 高約 6.3 尺、低 6.1 尺
欄	吊欄: 形式: 有 寸法(D×H): (図面表記なし) 材料: 竹	有 (図面表記なし) 杉変板、桐	有 (図面表記なし) 桐	二重欄 0.99×0.9 尺 竹直径 0.8 寸、桐
袖壁吹抜	有無: 有 高さ: 約 1.4 尺	有 約 2.2 尺	有 約 2.2 尺	有 2.19 尺
内壁仕上げ	床柱: 六角山栗なぐり 落し掛け: 杉 0.07×0.3mm 中柱: ゆがみ番書 相手柱: あて丸太直径 90mm 床框: 杉みがき半柱 壁: 土塗壁	皮付丸太(ツバキ等)直径 90mm、無双四分、花掛金物、軸掛金物 (図面表記なし) 赤松まがり直径 60mm あて丸太 杉部丸太面皮貼物 90×90mm 東側: 木下り下地土塗ジュラク、一部: 防錆処理カシュー塗り	(図面表記なし) 有 赤松皮付直径 1.8 寸、直柱 有 (図面表記なし) 有 (図面表記なし)	袋釘(支給品) 有 直柱 (図面表記なし) 半丸太 京土塗、横波塗、サス入り、点前座: 壁塗りまわし
腰張	形式: (H=2.1 尺) 材料: 和紙	(図面表記なし)	(図面表記なし)	各座側: 二段張(H=1.8 尺) 点前座側: 一段張(H=0.9 尺)
茶道口	形式: 一本引き、方立口形式 寸法(W×H): 700×1,800mm 材料: 子り落し、本島両面タイコ機	方立口形式 850×1,575mm	片開き鏡戸、方立口形式 2.1×5 尺	和紙(白) 一本引き、方立口形式 2.2×5.19 尺
給仕口	形式: 一本引き 寸法(W×H): 650×970mm 材料: スプレー、障子和紙両面貼、横しげ、美濃紙伝統的に貼る	— — (茶道口と兼用か)	花頭口形式 1.92×5.2 尺	一本引き、花頭口形式 2.25×2.26 尺
廻り口	材料: 一本引き、引掛金物、杉板、棧戸、障子	棧戸、一本引き障子(美濃紙伝統的に貼る)、桑舟底引手、杉板	木製建具一本引き、さるおとし、ハサミ数居、掛け金物、杉板厚 0.023 尺	鉄掛かん、杉板厚 0.24 尺、はさみ数居
開口部	寸法(W×H): — 材料: —	障子: 551×510mm、可動ガラスルーバー: 500×600mm	障子一本引き、障子紙両面貼、和紙タイコ貼、下つり付 2.6×5 尺	— —
下地窓	寸法(W×H): 廻り口上部: (記載なし)、炉置横: 560×640mm 材料: 廻り口上部: 一本引き、炉置横: 一本引き、横しげ	一本引き障子(美濃紙伝統的に貼る)、桑舟底引手、片面美濃紙張、杉、可動ガラスルーバー一式、アルミ黒色	廻り口上部: 2.4×2.4 尺、炉置横: 1.8×2 尺、点前座: 1.2×1.5 尺	廻り口上部: 2.4×2.4 尺、床の間奥: 2.4×2.4 尺、水屋寄り: 2.4×2.4 尺
運子窓	寸法(W×H): 1,600×1,600 mm(床から 0 mm) 材料: 障子、引き違い、スプレー和紙貼、腰つき横しげ	アルミサッシ 754×1,790 mm 850×1,600 mm(床から 650 mm)	4.25×2.03 尺(床から 2.48 尺)	5.2×2.05 尺(床から 1.45 尺)
障子			障子引違	引違、猿戸付、猿戸入替、障子 2枚: 秋田杉、和紙貼、猿戸(雨戸仕立)、簾: 内腰掛け座面まで 障子無塗装、中骨はりゃんこ組、紙は美濃紙(和紙)重ね貼(れんが目地のようなりゃんこ)

では道具を置き合わせて点前をし、そうした諸道具や所作、そういうすべての雰囲気茶室の中に満たして、茶室ともども茶の湯の雰囲気、言いかえれば、亭主の意図した茶の湯の境地を客に提供するのです。」^{引用2)}と述べている。

中原の設計した三疊台目風炉先床の小間は、3件とも一円庵のように床の間と点前座の間の下部を吹抜とはしていない。このことから中原は、正客からは意図的に点前が見えない、若しくは見にくいように設計していたとみられる。これは、亭主の点前よりも、床の間への視線を重要視した結果であると思われる。

開口部の中でも比較的面積の大きい連子窓の配置について注目すると、光の扱いが見えてくる。中原の設計した三疊台目の連子窓は、全て、蹴り口と床の間との間の畳に光が当たるよう配されている。客座とその向こうにある床の間を照らす構成となっている。床の間は、茶会の主旨や亭主の意図を最も示す飾りが置かれる空間である。中原の設計した三疊台目は、その床の間に障子を介した光を当て、空間に浮かび上がらせることで、亭主が客をもてなす空間として床の間が重要視されていることがわかる。

深三疊台目とすることで、平面形状は正方形となり、住宅との兼ね合いを考えるとプランニングがしやすい。

Mor 邸は、茶庭との関係で、蹴り口の位置は異なるものの、平面形状や茶道口・給仕口の位置・形式等が同じことから「不審庵」を参考にしていてのと考えられる。茶道口の幅を2.8尺から2.1尺に縮めることで、点前座に棚を配置するも、幅5寸の板畳は設けられていない。

謝辞

本研究は、平成30年度東京家政学院大学若手研究者研究費助成を活用し、遂行した。また、ハヤナ設計同人の元所員の白井克典氏、大島康治氏にはヒアリング調査にご協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

図版出版

Fig.1 北尾春道：茶室の展開図：16（光村

推古書院、京都、1979.8)

- Photo1 中原暢子：茶室のある家・新建築住宅特集1986年10月号：45（1986.10）
- Photo2 中原暢子：茶室のある家・新建築住宅特集1986年10月号：42（1986.10）
- Photo3 正宗量子：おもてなし雑感. UIFA JAPAN NEWS LETTRE 32：4（1998.11）

引用文献

- 1) 中原暢子：“茶室：空間構成美を展開図から分析考察する”—現代住宅建築の空間構成 II—, 東京家政学院大学紀要 27：63-71（1987）
- 2) 中村昌生：茶の湯案内7 茶室の見方. 95（主婦の友社、東京、1984.9）

参考文献

- 1) 近藤康子：堀口捨己の建築思想における中柱の意味, 日本建築学会計画系論文集 82 巻 738 号（2017）
- 2) 東京家政学院：東京家政学院五十年史（東京家政学院、東京、1975）
- 3) 江戸千家茶の湯研究所：不白筆記（茶の湯研究所、東京、1979.12）
- 4) 深石圭子：建築家中原暢子の茶室設計の系譜についての考察 —建築家中原暢子の研究 第5報—, 東京家政学院大学紀要 57：107-124（2017）
- 5) 柳下洋一、北川允昭、中原暢子：三つの異つた生活単純な平面にまとめる. 別冊婦人画報モダンリビング 4：44-46（1995.3）
- 6) 六家（元）とは、表千家、裏千家、武者小路千家、藪内家、小堀家、山田家を指す。
- 7) 中原暢子：池辺陽 システマチックな感覚と人間的魅力. 素顔の大建築家たち 02：63（建築資料研究社、東京、2001.6）
- 8) 中原暢子：茶室と水屋. 食べる空間・作る空間. 92-99（彰国社、東京、1984.11）
- 9) 中原暢子：女性建築だから建てられた住みやすい家. Sophia 3-6：198-200（1986.6）
- 10) 段木一行：文化財散歩シリーズ 12 東京文化財散歩, 192-193（学生社、東京、1977.10）
- 11) 中原暢子：“茶室：空間構成美を展開図から分析考察する”—現代住宅建築の空間構成 II—, 東京家政学院大学紀要 27：63-71（1987）

政学院大学紀要 27 : 63-71 (1987)

要旨集 2018 年度版 / 平成 30 年度版 : 110-111 (2019.1)

- 12) 熊谷愛希 : 建築家中原暢子の自邸と茶室. 東京家政
学院大学 現代生活学部 生活デザイン学科卒業研究

(受付 2019.3.27 受理 2019.6.6)